

「1対ルート2」

JJ1SXA 池

「1対ルート2」は45度の三角定規の底辺対斜辺の比、ルート2は「いよいよ兄さん…イヨイヨニイサン」とか、「一夜一夜に人見頃…ヒトヨヒトヨニヒトミゴロ」などと覚えたのは随分大昔の話です、今更、「ルートの話など持ち出さな！」との声も聞こえてきそうですが、割り切れないで、少数点以下どこまでも続く「ルート2」、これが結構日常生活について回っている数字なのです。

行政文書は、1993年から、A4版に統一されましたが、「TWO-FOTY」誌は、郵送料や原稿の文書量を考えて未だに採用しているのがB5版。

この、A版、B版のサイズはどちらも縦横比が「1対ルート2」、長辺を半分に切ってサイズを半分にして小さくしていくと、どんどん数字が大きくなっていきます(0~10)が、縦横比はどこまでいっても「1対ルート2」。

このサイズの決め方は、先に長さありきかと思ったら、面積でした、A0は、1平方メートル、B0は、1.5平方メートルなのだそうで、現在は「国際標準化機構…ISO」でも採用されていますが、A版はドイツの規格、B版は日本の規格で、昭和4年(1929年)にドイツ方式の計算方法を採用して決められたようです。(JIS 仕上げ寸法は、A0=841mm×1189mm、B0=1030mm×1456mm となっていて面積は若干違う)

江戸時代、尾張、紀伊、水戸のご三家が使っていた格式の高い紙の寸法が美濃版と呼ばれ、明治時代に標準寸法として広がり、これがB版の源流となったようです。

大工さんの使う「かね尺」(曲尺、さしがね等とも言われる)、現在はメートル法の物が主流?のようで、電卓の発達で計算尺と共に余り注目されないようですが、寸法を測る他、直角を計る、円周の寸法だし、計算尺として勾配を出す、その他諸々…この優れもの「尺目盛のさしがね」が残されているようで、表の目盛りは普通の寸法がふつであるが、裏の目盛りは表の寸法のルート2倍の数字…ここにも「ルート2」

かね尺は聖徳太子が日本に持ち込んだそうですが、江戸時代の文人「蜀山人…シヨクサンジン」が、このかね尺の1対ルート2の比率を書物などに使ったら「格好よろし」と書き残しているようで、かね尺の歴史は古く、はるか昔にルート2を使う道具を開発した中国人の知能には恐れ入ります。

かね尺使いが覚えなければいけない「勾股弦(勾股玄=こうこげん)」…勾は直角三角形の短辺、股は長辺、弦は斜辺で、ピタゴラスの定理を応用して、色々にかね尺を使いこなす人は高度の技術者です、ねっ FEY さん。

私も、イヨイヨニイサンなどに頭を痛めているようでは駄目ですが、ヒトナミニオゴレヤ、フジサンロクオームナク…と自然に口をついて出てくるのは、若い時に覚えたからでしょう、最近では、朝覚えた筈のことが、夕方にはどこかへぶっ飛んでしまい、歳はとりたくない、ついつい愚痴の方が先になる今日この頃です。